

# Be My Style

ひと・わざ・みらいへ

現代のライフスタイルにふさわしい発想と感性で、湖国にCoolな風を起こすものづくりの秘密に迫ります。



日本の住空間にとけこむ  
鍛造の新たな形を探して

熱した鉄の棒を金床に据えて流れるような動作でリズムカルに叩く青山さん。「打ち下ろす時にハンマーの重みに任せると、反動で上がる力を利用できるので、力はあまり使わないですよ」



鍛冶の本場オーストリアのイブジッツ市長が命名し、名工ハーバーマン氏考案の書体を使って青山さんが制作した工房のサイン。

表紙写真の椅子は、青山裕次氏とアーティスト清川あさみ氏とのコラボレーション。

## 鍛冶職人 青山裕次さん

HAUS YBBSITZ IN JAPAN

扉やフェンス、ドアの取っ手、店舗の看板など、実用性とデザイン性を兼ね備えたパーツとして洋風建築物には欠かせない「鍛造」。日本では数少ない鍛造の工芸家・青山裕次さんを高島市マキノ町の工房に訪ね、テレビ局のディレクターから転身した異色の経歴や鍛造の魅力について語っていただいた。



鉄の特性を生かしたキャンドルスタンド『水上からの花火』はしっかりした安定感と、人が傍らを通るとかすかに揺れる繊細さが見事に両立。下部は4本の鉄の棒が美しく編み込まれている。

ほっそりとした長い軸ながら安定感のあるワインクーラー。この細さでこの高さには鉄という素材ならではの。



1:有機的で繊細な鉄の線が印象的な門扉と、そこから敷地に添って弧を描くように続くフェンス(松山市Y邸)。  
2:住宅2階廊下の手すり(京都市N邸)。鉄をねじって角度を変えることで施主の頭文字Kが透けて見えるデザイン。



底冷えのするほの暗い工房で橙色に焼けた小型の炉の扉が開く。炉で1200℃近くまで熱せられた鉄の棒の先端が白っぽく発光するさまを間近に目にして、その熱さを想像すると思わずたじろぐ。  
青山裕次さんは熱した鉄の棒を寸分のたゆみもなくすっと炉から取り出し、素早く金床(アンビル)と呼ばれる作業台の上に移動させて大きなハンマーで叩き始める。炉から出したばかりの燃えるような鉄は想像以上に柔らかい。初めは鉄の先端部分をのぞきこみ、そっと優しく向きを変えながら叩き、手元に行くにつれだんだん強くハンマーを振

素材の鉄は1200℃!  
高温の鉄を自在に造形する鍛造

り下ろす。ハンマーが当たると鉄の表面の赤片が飛び散り、森閑とした工房に鉄を叩く重い音がリズムカルに響く。  
鉄が冷えて硬くなると再び炉内へ。鉄の棒を炉から出して戻すまでは1分足らず。冷えた鉄の棒を再び熱している間、次の棒を炉内から出して作業をする。  
「鍛冶は別名、火造りとも呼ばれ、火が仕事の中心です。火をおこした後は火が最優先。例えば電話がかかったり呼ばれたりしても作業を中断することはありません」  
鉄の棒の先端がすべて同じように丸く成形できたところで青山さんはそう言った。



炉内の鉄の棒の焼け具合を確認する青山さん。鉄の表面だけでなく中心まで均一に熱くなるのをじっくり待つことが美しく強い鉄をつくるコツの一つ。

「自分の思い通りに造形できるのが鉄の魅力。今は日本の家に合う『日本のなもの』を意識して制作しています」

手づくりの鉄に触れて  
本物の味わいや温もりを  
身近に感じて欲しい

2003年から5年間、本場の技を吸収しようと鍛冶が盛んなオーストリアのイブジッツに通い、現地での鍛冶の世界大会にも参加し、鍛冶ミュージアムでは世界の鍛冶職人4人に名を連ねた。さらに、鍛冶界のロスマ法王と呼ばれた名工・故アルフレッド・ハーバーマン氏と親交を深め、2006年には青山さんの工房を訪ねたハーバーマン氏と共同でミニチュアを制作する。

本場ヨーロッパの技術に触れる一方で、アーティスト清川あさみ氏とのコラボレーションで椅子(表紙写真)を制作するなど、鉄による新たな表現を模索し続けてきた。そして、工房を開いて10余年たった今——「ヨーロッパの鉄を追いかけるのではなく、日本人として鉄で日本のものをつくりたいと考えるようになりました。日本の家にはデコラティブ(装飾的)なものには似合わないと感じて、最近ヨーロッパ風の唐草デザインはあまり使っていないんです」

近年、青山さんが力を入れているのがワイヤークラヤーやキャンドルスタンド、椅子など室内で使う鉄のインテリアだ。「例えばキャンドルスタンド(1ページ下写真)は鉄の復元

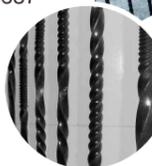
力を生かした作品で、風に揺れるようにつくりました。人がそばを通っただけでもかすかに揺れるくらい繊細で、不安定に見えるけれども、その形をしっかり維持する。これは鉄という素材でなくてはできないことなんです」

できるだけ多くの人に手でつくり上げたい。鉄に触れて、本物の味わいや温もりを知って欲しい。鉄をもっと身近に感じてもらいたいとの願いからワークショップにも力を注ぐ。高島市安曇川町の「たいさんじ風花の丘」にある、子どもたち50人と一緒につくった手づくりは一例だ。子どもでもねじったり曲げたりできる熱い鉄の驚きの柔らかさと独特の質感に奥深い魅力が隠されている。



安曇川町の交流施設「たいさんじ風花の丘」の手すり。2006年2月、青山さんが地元の子どもたちと一緒に制作した。子どもたちの感性と手づくりの温かみが伝わってくる。

DATA  
HAUS YBBSITZ  
IN JAPAN  
高島市マキノ町419  
TEL. 0740-20-5637



「鉄は熱いうちに打て」の言葉通り、炎のように十分に熱していかなくては成形できないのが鉄。しかし、青山さんには、時間との勝負、といった気ぜわしさはみじんもない。無駄のない熟練の動作で、すべての作業が流れるように進んでいく。

自らを「鍛冶職人」と称する青山さんが専門とするのは「鍛冶」による鉄の建物金物や装飾品。オリジナルのデザインで扉や椅子やフェンス、店舗などの看板からランプや椅子といったインテリアまで幅広く手がけ、日本では数少ない鍛冶の工芸家として活躍している。

金属を熱で溶かして鋳型に流し込む「鋳造」に対して、「鍛冶」は金属を打って形をつくっていく。叩いて鍛えることで金属組織内の空洞や歪みがなくなり、強度が増して耐久性が向上する。鉄の鍛冶はヨーロッパでは古くから広く普及している技術だ。

## テレビディレクターから “ものづくり”の世界へ 37歳で始めた職人修業

青山さんが金属工芸と出会ったのは37歳の時。職人としては遅いスタートだ。大学卒業後は大手放送局に勤務して、報道番組のディレクターとして充実した日々を送っていた。しかし、年齢を重ねれば内勤にな

り、やがて定年を迎えるのが組織のルール。取材に出ることが何より好きで、内勤への人事異動に直面した時、「死ぬまで一つの仕事を続けたい!」という思いが強くなり、37歳で退職を決意。取材を通して触れたものづくりをしている人たちの生き方への憧れから、東京の職業訓練校の金属造形科に通い始める。

テレビの世界から鍛冶職人へ、思い切った転身に思えるのだが「番組をつくるのも、鉄で作品をつくるのも、ものづくりという基本はまったく同じだと思います」と青山さんはさらりと語る。

いろいろな選択肢の中からなぜ鍛冶を選んだのだろうか? 「どんな職人になりたいのかを考えていたら、ふと童謡『村の鍛冶屋』が心に浮かんで、鉄を叩いているイメージが人を結んだんです。鍛冶を仕事にしている人は少ないからライバルも少なそうだなという狡い計算も実はちよつとありました」といわずらっぽく笑う。

職業訓練校に半年通って鍛金を学ぶ中で、鉄という素材に引きつけられた。

「鉄なら自分の思い通りに造形ができる。そこに魅力を感じました」

半年間の課程を終え、埼玉での3年半の修業、京都府宇治市での共同工房を経て、2005年、45歳で自らの工房をマキノ町に構えた。

## これが「鍛冶」の技 鉄は熱いうちに打て!

鉄の棒の先端を炉で1200℃近くまで熱する。炉に何度も出し入れし叩くと鉄がやせてしまう。出来るだけ少ない回数で効率良く目的の形に成形するため、十分に熱くなるまでじっくり待つことが重要(写真1)。



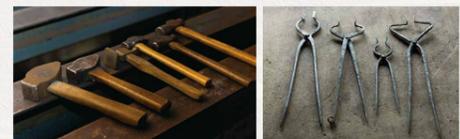
ハンマーで叩く作業はまさに時間との勝負。鉄が熱いうちに、狙ったところを素早く、無駄なく叩いて成形する(写真2)。



炉から出して叩いた鉄を型にはめて曲げ、金床で叩いて微調整する。鉄は熱いうちなら子どもでも簡単に曲げられるほど柔らかい(写真3)。



出来上がった複数のパーツをつなぎ合わせて作品に仕上げる。



愛用のハンマーと自作のトンク類。「鍛冶の仕事はデザインの考案、道具をつくること、叩くこと。制作前にはまず作品に合わせた道具や型をつくるのが必須。道具がつかれないと一人前の鍛冶職人にはなれない。